

“農業優等国” カメルーン

門 村 浩

ミニ・アフリカと言われるカメルーン共和国を、熱帯アフリカの環境変動研究のフィールドに選んでから、ちょうど12年が経った。昨年の11～12月には、通算5回目、3年ぶりに同国を訪れた。

カメルーンは、よくアフリカ農業の優等生だといわれる。10年ほど前に産油国になった後も、いたづらに工業化・近代化を急ぐことなく、農業立国に専心して食糧増産に励み、食糧危機が叫ばれるアフリカの国々の中であって、食糧作物の自給自足体制の確立を目指して頑張っているからである。“農業優等国”カメルーンの一側面を示そう。

首都ヤウンデの街には、森林地帯から求心的に集まる道路の入口にたいい広場があり、小屋掛けや露天の市場が立って、いつも大勢の人で賑わう。うず高く積まれた彩りどりの生鮮食料品の鮮やかな色彩が一際目だつ。葉菜類やサヤインゲン、ブランテン・バナナ（料理用）、トウモロコシなどの緑、トマトやトウガラシの赤、マンダリンやオレンジの橙色、熟れかけたパパイヤやバナナ（生食用）、グレープフルーツ、レモンの黄色、キャッサバやタロイモ、ヤムイモ、マカボ、サツマイモの褐色……、街の周辺の熱帯降雨林地帯で生産される食糧作物と果物が勢ぞろいしている。

市場の売り手は、たいい女性である。こうした女性

によって支えられている市場は、地方の町にも必ずあり、“女性の市場”と呼ばれる。彼女達は、自分達が生産した余剰の農産物を市場に運んで売り、現金収入を得、衣類や日用雑貨品などの購入とともに、子供の教育費に当てている。

アフリカの多くの国でそうであるように、この国の農業、とくに自給用の食糧作物生産の主役は女性である。焼き畑耕作で食糧作物が栽培される地域での農作業を見ると、男性がかかわるのは伐採と火入れだけである。その後の開墾から多彩な作物の種蒔、除草、収穫に至る一連の作業は、専ら女性の手でなされている。サバンナなどの常畑になると、一連の作業が女性だけで行われるのが普通である。食糧作物の生産に関する限り、この国の農業の進展は、小規模農民の主体である女性によって支えられているといっても過言ではない。

“女性の市場”に並ぶ農産物の豊富さと喧噪の程度とは、この国の農業の安定成長のいかんを示すインディケーターなのである。カメルーンに限らず、アフリカの国々を訪れる機会があれば、“女性の市場”を是非とも観察してほしいものである。この市場には、アフリカの農業の現状と問題点を知る多くの手がかりが秘められているように思えるのである。

（東京都立大学）